様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１２日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７２０１１６
研究課題名（和文）　方言変容の「フィルター」として働く地域社会の構造と志向性

研究課題名（英文）　A study of the structure and the preference of community that cause change of dialects

研究代表者
日高　水穂（HIDAKA MIZUHO）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：80292358

研究成果の概要：地域社会の構造と志向性が「フィルター」となって、独自の方言変容を生じる現象について、各地の事例を収集し分析した。方言の体系変化に関与する「フィルター」の働きを明らかにし、さらに、現在地域社会で活発に行われる方言の活用が、方言変容にどのように関与するかという観点での考察を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総　計	**3,200,000**	**360,000**	**3,560,000**

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：言語学、国語学

１．研究開始当初の背景

方言差は、言語変化に地域差があることにより生じる。ある言語に方言差があることは、元は同じ基盤に立つ言語であっても、地域によって引き起こされる言語変化が異なる場合があることを意味する。方言の形成については、これまで、「方言周圏論」、「方言孤立変遷論」、「多元的発生論」などによって説明されてきた。いずれもある言語変化が生じるか否かに地域差があることにより方言差が生じるとする点では共通しているが、そうした言語変化に地域差が生じるそもそもの要因については、これまで十分には明らかにされて来ていない。

また、「方言周圏論」では、周辺地域は文化的中心地で生じた言語変化を一律に受容するものと想定されているが、実際には、伝播を受容しない地域というものもあり得る。受容する場合にも、伝播したものを一律に受け入れるのではなく、独自の再構成によって変容させる場合もあると考えられる。

これまでの方言形成論は、中央からの視点によって構想されてきた面が強い。本研究は、言語変化の実際の舞台となる、地域の側の視点に立ち、分析を行うところに特徴がある。

また、現代方言は、自立的な「言語」としての性質を弱め、共通語の一要素として活用される段階に至っている。地域社会における方言の活用に関しては、事例収集的な研究は存在するものの、それを地域の社会特性や志向性と結びつけて考察するものは多くない。方言の活用という現象が生じる社会的な背

景とそれを行う地域社会のあり方を分析する点も本研究の特徴である。

２．研究の目的

本研究では、地域社会の構造的特性（階層差や都市化の程度、それに伴う生活様式）や志向性（規範意識、人の気質）を「社会フィルター」と呼び、ある種の言語変化が、この「社会フィルター」を介して生じると考える。こうした想定のもと、「社会フィルター」を介した言語変化の事例を分析することにより、方言差が生じるプロセスを明らかにしていく。

さらに、現在、地域社会の中で活発に行われるようになっている方言の活用（「地域性のインデックス」としての方言使用）が、方言の変容にどのような影響を生じるかを見ていく。

３．研究の方法

(1)方言の体系変化に関与する「社会フィルター」に関する調査・分析

フィールドワーク及び既存の方言資料（方言集、方言地図、方言談話資料等）からデータを収集し、分析を行う。分析対象とする言語現象と方言は、以下のものである。

・「のこと」からコト・トコ類への格助詞化（東北方言）
・「とりたて否定形」（シワシナイ相当形式）の文法化（全国方言）
・可能表現の体系変化（東北方言）
・アスペクト表現の体系変化（中部方言）
・授与動詞の体系変化（九州方言）
・親族語彙の体系変化（秋田方言）

(2)方言の活用が方言変容に与える影響に関する調査・分析

フィールドワークにより、方言の活用例を収集し、分析を行う。分析対象とする事例と地域は、以下のものである。

・「県民性」言説に用いられる方言性向語彙（秋田）
・「ふるさと資源」として活用される方言語彙（秋田）

４．研究成果

(1)「のこと」からコト・トコ類への格助詞化に関与する「社会フィルター」（雑誌論文(3)）

「のこと」からコト・トコ類への格助詞化の現象は、東北地方の太平洋側の方言で変化が遅れ、日本海側の方言で変化が進んでいる。これはすなわち、中央語よりも方言で変化が進んでいる、ということであり、中央から離れた地域の方言では標準語から逸脱する変化が促進されるということを示している。

各地方言で現在進行中の文法化現象を対照させることによって、中央からの距離が方言差を拡大させるメカニズムを、現代方言においても検証できることを示した。

(2)「とりたて否定形」の文法化に関与する「社会フィルター」（雑誌論文(2)・学会発表(3)）

「とりたて否定形」（シワシナイ相当形式）の文法化のプロセスには、次の２つの段階が見られる。

(a)「とりたて否定形」の発生
(b)「とりたて否定形」の単純否定化

(a)には、述語要素を助詞ワによってとりたてる造語法の発達が関わっており、この造語法をもたない東北・新潟北部・北陸方言では、「とりたて否定形」のみならず、断定辞の否定形であるデワナイ相当形式も用いられない。

一方、関東から九州にかけての大部分の方言では、述語要素を助詞ワによってとりたてる造語法を発達させており、「とりたて否定形」やデワナイ相当形式が用いられる。特に、近畿方言では、「とりたて否定形」が単純否定の意味で用いられるという(b)の現象が生じており、「とりたて否定形」の文法化がもっとも進んでいる。

「とりたて否定形」の文法化は、地域的には文化的中心地の方言で促進され、周辺部の方言で抑制されている。これは、迂言的な表現を好み、表現体系をより多様なものに変化させていく都市社会の志向性と、直接的な表現を好み、より単純な表現体系を発達させやすい地方社会の志向性を反映したものとも言える。

一方で、「とりたて否定形」の文法化の地域差は、より高次の言語体系の地域差によって生み出されたものであることが明らかになった。言語の緊密な体系性の中で生じる文法の変化をとらえるためには、当該の変化に関わる、より高次の言語内的な要因の働きを見極めることが重要であると言える。

(3)方言接触地域における方言変容のあり方（図書(1)）

東北方言の可能表現、中部方言のアスペクト表現、九州方言の授与動詞は、いずれも２つの異なる表現体系が接触する状況にある。そうした方言接触地域において生じる混淆体系の特徴と、両者の勢力関係（伝播・受容関係）との関わりを見た結果、勢力の強い方言の体系が採用され、勢力の弱い方言の言語形式が改変されて使用される、という現象が確認された。

方言形成のプロセスを明らかにするためには、伝播方言の動向だけでなく、受容方言との接触による変容を見ることが有効であり、また、それによって方言間の勢力関係を

読み取ることも可能になる。こうした取り組みを重ねることによって、これまで軽視されがちであった、周辺地域における言語変容のメカニズムを明らかにすることが可能になると思われる。

(4)親族語彙の体系変化に関与する「社会フィルター」（図書(4)）

親族語彙の表す親族関係は、「親子関係」「キョーダイ（兄弟姉妹）関係」「婚姻関係」の３つの関係の組み合わせから規定される。日本語（標準語）の親族語彙を見ると、「親子関係」と「キョーダイ関係」を表す男性親族語と女性親族語には形態的な対称性が認められるが、秋田方言の男性親族語と女性親族語には、以下のような非対称的な体系変化の現象が見られる。

(a)同じ家で用いられる「祖父／祖母」「父／母」を表す語では、男性親族語の方が女性親族語よりも格式が高いとされる語形（敬意度の高い形態素を含む語形）が用いられる傾向がある。

(b)〈東日本型〉の「キョーダイ関係」を表す語彙体系のうち、次子以下の女子を表すオバ類の語が使われなくなる傾向がある。

(a)(b)はともに、「家」の中心である家長（とその候補者）を優遇することから生じた現象であると考えられる。親族語彙のような社会のあり方を反映しやすい言語項目を見ることによって、言語変化のプロセスを、より詳細に観察することが可能になるということを示した。

(5)「県民性」言説に見られる方言性向語彙の活用と方言変容（雑誌論文(1)）

2007年７月に秋田県は「秋田人“変身”プロジェクト」をたちあげた。そこでは、秋田人の「県民性」について、「まじめ」「穏やか」「温かい」という〈長所〉とともに、「ひやみこぎ（怠け者）」「挑戦力が少ない」「ええふりこぎ（見栄っ張り）」という〈短所〉をあげ、「良いところは伸ばし、変えるところは変えていこう」と呼びかけている。

秋田では「県民性」によって地域の社会事象を説明するという語りのパターンが、すでに定着したものとなっており、「秋田人“変身”プロジェクト」は、そうした土壌の上に成立したものと言える。

ところで、秋田で語られる「県民性」言説を観察していると、「まじめ」「穏やか」「温かい」「誠実」「勤勉」といった〈長所〉とされる性向は共通語形で示されるのに対して、〈短所〉とされる性向に関しては「ええふりこぎ」や「ひやみこぎ」といった方言形が使用される傾向があることに気づく。こうした「県民性」を象徴的に示す方言性向語彙の代表的なものとしては、「津軽のじょっぱり」「土佐のいごっそう」「肥後もっこす」「沖縄のてーげー主義」などがあるが、「秋田のええふりこぎ（もしくはひやみこぎ）」は、これらに比べて県外での認知度は決して高いものとは言えない。つまり、「ええふりこぎ」や「ひやみこぎ」は、秋田人が自らに対して言及する「県民性」言説の中で特に使用されるものだということになる。

「秋田人“変身”プロジェクト」では、最終報告で、子ども、家庭、男、リーダーに「変身」を求める「４つの提案」を行った。こうした提案を「県民性」と結びつけて語ることの効果としては、「県民性」という仮想の集団的性向を設定することによる、「当事者」意識の醸成、ということがあるだろう。上記の「４つの提案」を、「秋田の活性化のための提言」として示しただけでは、どこでも成立し得る課題であるだけに、県民にとって切実な問題としては受け止められない。ところが、こうした提案が、秋田の「県民性」に起因する課題である、とされれば、その課題は、秋田県民にとっての固有の課題、という受け止め方がなされるようになる。そうした「当事者」意識を引き出す装置として、「県民性」言説は機能するのである。

「県民性」の〈短所〉を表す語が方言であるのは、そうした「当事者」意識をかき立てるものとして、方言が機能するからである。この場合、変える必要のない〈長所〉は、共通語であってもかまわない。変えるべき〈短所〉を方言で提示することによって、「ひやみこぎ」「ええふりこぎ」が、自分たちの乗り越えるべき悪弊であると認識させられるのである。

このような地域住民に向けた方言の活用は、現代方言の機能を質的に変容させるものと言える。方言は、生活言語としての使用を共通語に譲る一方、「地域性のインデックス」として「再生」しつつあるとも言える。

ただし、地域の社会問題を「県民性」に起因するものと見なす言説自体は、問題の本質を問いただす目を曇らせるものでしかない点には十分に留意する必要がある。

(6)「ふるさと資源」として活用される方言（学会発表(1)）

現在、地域社会で活発に行われる方言の活用には、地域の「外」に向けたものと「内」に向けたものがある。前者は観光資源化・商品化などに見られる方言の活用を指す。後者は「地域の紐帯」としての方言の活用を言う。

地域の固有のことばである方言は、同じ方言を話す者同士の仲間意識を高め、連帯感を生み出す働きをもつ。こうした方言の機能を利用して、「地域アイデンティティ」の形成につながる方言の活用例が見られる。

こうした方言の活用は、方言に対する社会

的な価値観が変わる中で起きている。本土方言の多くは、すでに言語としての自律性を失い、共通語を構成する要素の一部になってしまった段階にあるが、「方言」に由来するそれらの「要素」は、日本語の多様性（日本社会の多様性）を現代日本人に気づかせる、重要な要素であると言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

(1)日高水穂・石沢真貴・近藤智彦「秋田における「県民性」言説の創出と再生産」『秋田大学教育文化学部紀要　人文科学・社会科学部門』第 64 集、2009 年 3 月、査読有

(2)日高水穂「文法化理論から見る『方言文法全国地図』―「とりたて否定形」の地理的分布をめぐって―」『日本語学：方言文法全国地図をめぐって』26 巻 11 号、2007 年 9 月、査読無

(3)日高水穂「文法化の地域差―「のこと」からコト・トコ類への文法化と地理的分布―」『日本語学』25 巻 9 号、2006 年 8 月、査読無

〔学会発表〕（計３件）

(1)日高水穂「現代方言とフォークロリズム―秋田の事例から―」、日本言語学会（「危機言語」小委員会）主催公開シンポジウム「日本のなかの危機言語―アイヌ語、琉球語、本土方言―」（東京大学、2009 年 3 月 14 日）

(2)日高水穂「敬語と授与動詞の運用に関わる現場性制約―日本語諸方言の対照研究の観点から―」、日本語文法学会第 9 回大会「シンポジウム「ダイクシス」」（甲南大学、2008 年 10 月 18 日）

(3)日高水穂「方言差を生じる言語変化の促進力と抑制力―方言差再生産のメカニズム―」、日本方言研究会第 84 回研究発表会（関西大学、2007 年 5 月 25 日）

〔図書〕（計４件）

(1)日高水穂「方言形成における「伝播」と「接触」」山口幸洋博士の古希をお祝いする会『方言研究の前衛　山口幸洋博士古希記念論文集』桂書房、2008 年 9 月

(2)島村恭則・日高水穂編『沖縄フィールド・リサーチⅡ』秋田大学教育文化学部、2008 年 3 月

(3)島村恭則・日高水穂編『沖縄フィールド・リサーチⅠ』秋田大学教育文化学部、2007 年 2 月

(4)日高水穂「秋田方言の親族語彙の体系変化に見られる非対称性」真田信治監修／中井精一・ダニエル=ロング・松田謙次郎編『日本のフィールド言語学―新たな学の創造にむけた富山からの提言―』桂書房、2006 年 5 月

〔その他〕
ホームページ「沖縄フィールド・リサーチ」
http://www.ipc.akita-u.ac.jp/~hidaka/web/okinawa/

６．研究組織
(1)研究代表者
日高　水穂（HIDAKA　MIZUHO）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：**80292358**